

IPM アカデミーの運営は、何事も“身のほど”でやっています

日本アイール社は 1974 年に創立しました。小さな会社であっても社会に必要とされる会社になること、お世話になっている特許業界へ少しでも恩返しすることを目標としてきました。その一環として、1990 年に知的財産活用研究所を立ち上げました。当研究所が、これまで発信してきた知財関連の研究レポートや教材をネットで公開する場として、2016 年に IPM アカデミー (IPMA) を立ち上げました。大きなことはできませんが、IPM アカデミーは、あくまでも身の丈にあった“身のほど”での運営を心がけて参ります。よろしく御願います。

1. とりあえず役にたつことを喜ぶ

大したことは出来ないが、お役に立つことがあれば喜ぶ

2. 正しいことを見失わない

何が正しいかを絶えず“考えて、考えて、考え続ける”

3. けっして無理強いはしない

人は立場が違えば考えも違う、こちらの考えを押し付けない

4. 人は様々、腹は立てない

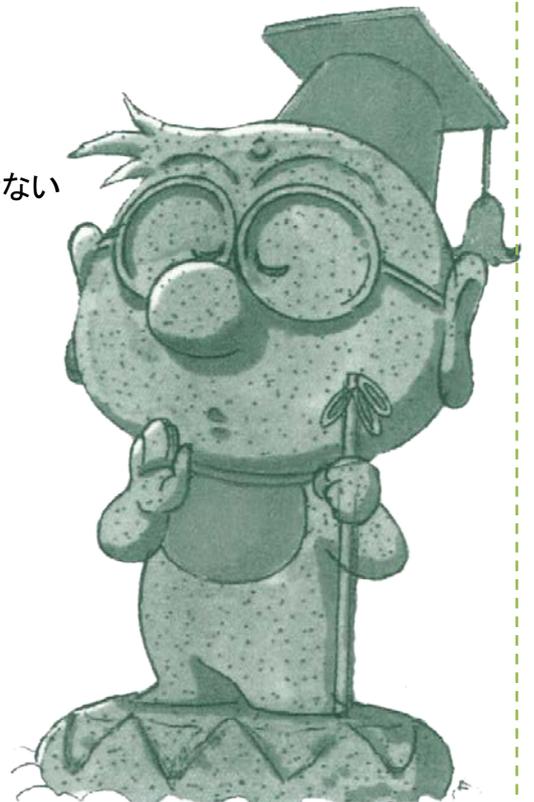
どんな批判をされようと、意見として謙虚に聞く

5. 人とのご縁を大切にしたい

人のゴツ煮こそ、いい味が出る

6. 何事も“身のほど”を超えない

目先の利益に囚われず、足を踏み外さない



発明くんの身のほど地蔵

IPM アカデミーが目指していること



IPMアカデミーは、知財問題に関して様々な観点から情報を発信しております。書籍と違い、ひとつのコンセプトを纏めたものではありません。適宜に小テーマを取り上げて、バラバラに発信しております。IPMアカデミーが発信する情報の基本コンセプトは、下記の4項目に分けられます。全てが当たり前のことを提唱しています。しかしその当たり前を実行することの難しさがあります。これらの資料が「知財立国日本」の目標に少しでもお役に立つことがあれば嬉しいことです。これからも地道に啓蒙活動をして参りますので、どうぞよろしく御願います。

1. 世界へ「物・事・考え」を伝える「平明日本語運動」

「知財戦争」とは、言葉の戦争である。「知財共生」とは言葉の理解である。

2. 世界の情報を収集し、世界へ情報を発信する「英語力運動」

英文構造を理解する。機械翻訳ソフトの支援が受けられる日本語で発信する。

3. 世界で活躍ができる知財人材の「人材育成運動」

答えは一つではない。自分のアタマで考える。論理力を身につける。但し、日本人としてのアイデンティティを失うな。

4. 会社利益に貢献する「知財経営運動」

知的基盤の構築。知財戦略の策定。知財コストの削減。知財文書の品質管理。「開示・守秘知財」の出願戦略。知財係争の回避策。全社員の知財教育。

知財問題をどのように解決しているのか、お聞かせ頂けませんか



知財部門はグローバル知財で様々な問題を抱えています。これまでの業務を見直し、改善すべき処はたくさんあります。しかし様々な事情で改善が進まないのが現状です。

IPMAは下記の研究課題に取り組んでいます。夫々異なった立場で仕事をしている方の声を聞くことで現場の実態を知り、更なる改善策が生まれ実行の道筋が見えてくると考えています。

1. 「知財品質」を高め、「知財コスト」を削減

グローバル化で特許出願国の指定は増えていきます。特許出願に関わる費用は増え続け、各国特許明細書の品質にバラツキが生じるという問題を抱えています。

2. 研究開発部門の「知的基盤(インフラ)」を構築

「成熟・衰退期」における、筋の良い「研究開発テーマ」の発掘が上手く行っていません。

3. 自社独自の「知財戦略」を策定

自社の事業実態と「知財戦略」は乖離しており、知財経営の実践が進んでいません。

4. 上層部の理解のもと、社内で知財教育を行える教材作成

知財学習の領域は多岐に渡り、また知財に対する興味は温度差があります。受講者が興味を寄せ、知財力がアップする「知財教育コンテンツ」が求められています。

5. 世界規模で情報を分析し、会社の持続的発展を目指す

例えば、「IoT技術」の世界特許を分析することで、特許だけでは事業を守るのは難しく、特許の地位は低下することが予測されます。今後は特許、守秘知財、商標、意匠、そして著作権を重視した総合的な「知財マネジメント法」が求められるようになります。